

「授業備品」N06 H. 27. 7. 16 「授業の禁じ手 20」(「子供の活発な話し合いのある学習指導案」作成用)

多弁で教え込む知識・技能のメッキはすぐにはがれる。その場では覚えられても、すぐに忘れる知識・技能にすぎない。テストの点数だけを重視する授業で学んだ知識・技能だからだ。こうした授業は、子供が生きる力を身に付けさせることにはつながらない。「一夜漬け」の知識習得学習が人生には役に立たなかったことを思い出そう。どうか教師の指導に問題があることに気付いて欲しい。子供たちが学習活動の目的を把握し、自分の考えを幾度も表現し、まとめ・振り返りをする活動の中で知識や技能は身に付く。授業評価項目でもある「授業の禁じ手 20」を少しでも減らし子供の主体的・協働な授業を目指して欲しい。特に、「2 本時の課題が教科・領域の目標だけの標記」「11 教師が司会者(繋ぎ役)になっている」「13 発表の羅列で終わる授業である」「14 考察のない授業である」「16 教師が多弁である」、この点を留意して欲しい。

I 学習意欲を高める課題の工夫(見通し)(課題の提示・問いをもつ・問いの共有)

1 教師が自ら課題を設定している

学習課題は、子供が設定するものではなく教師が設定するものである。だが、学習指導要領の大きな理念である「自ら学ぶ」に照らし合わせれば教師が一方的に押し付けるものではない。そこで、課題設定に当たっては、子供が課題設定作りに参加するような形が望ましい。また、生徒指導 3 機能の一つである「自己決定(子供自身が自ら課題を見つけ、見通しを持ち、個人で思考したり表現したり出来るようになる)」を促すためにも子供たちを課題設定作りに参加させたい。

- ①導入部分の資料で気付いたことを発表させる
- ②授業者は、子供の発言をつなぎ課題設定をする
- ③既習学習や予想とのずれを意図的に作り、課題設定につなぐ

2 本時の課題が教科・領域の目標だけの標記となっている

教師主導の授業は、子供が教科内容をひたすら受け身でこなすことになる。この解決がアクティブ・ラーニングだ。授業の中で協働的に学ぶためにも子供が仲間で活動する方法も目標にするとよい。学習指導要領の総則に記載されてある「問題解決的な学習」の学び方がその一つである。

- ①教科目標の記載に加えて、「交流・考察」の部分も目標に入れる
- ②2 段書き(教科目標・問題解決学習)とする
- ③課題は、行動目標(～である、～と言える)とする

3 課題提示に時間がかかる

前時の復習や既習事項の話し合いに時間をかけることで課題提示までに多くの時間を費やす時がある。そのため本時の学習が途中で終えざるを得ない場合がある。教師の授業マネジメントができないことが原因だ。特に多弁な教師ほど説明が長く、課題提示までに時間がかかる。

- ①課題提示の仕方を工夫する
- ②導入はスピードで行う
- ③1 時間の中で本時の課題を解決するという意識を教師も子供も持つ

4 教師が解き方の方向性を示してしまう

答えを早く解かせるために教師が解き方の方向性を示す時がある。この方法では、考える力が付かないばかりか一部の子供しか学習についてこれない。子供が見通しをもたない中で授業を進めると、学習意欲をもてなくなる。

- ①解き方は子供に考えさせる
- ②解き方やスモールステップ型の説明は慎む
- ③教えるから、見守る指導に変える

5 大まかな見通し(解答)を全員がもてない

学習課題を提示した後、すぐに自力解決に入る。だが、大まかな答えの見通しを立てられない子供もいる。

そうした子供には、自力解決の中でヒントを与えたり個別指導をすることが多かった。そのため、学習課題を解けない子にとっては最初から苦痛な時間となったり、解かないで時間を過ごすことがあった。そこで課題解決が困難な子には、最初の段階から大まかな見通し(解答)をもたせるとよい。

- ①問いの共有(見通しを持つ)の時間で、全員が大まかな見通し(解答)をもっているかを確認する
- ②分からない子は、「分からない」と言い、分かる子から学ばせる
- ③見通し(解答)をもてない子は、答えから解き方の方法を見つけさせる

II 話し合いが深まる学び合い(言語活動・交流活動)(自力解決・集団解決(ペア・班・全体))

6 自力解決の時間が短い

自力解決(個人思考)は、一人でじっくり考える時間である。これまでの既習事項や経験を生かし自分なりに問いを解決する時間である。10～15分は時間をとりたい。子供が主体的な授業となるよう、じっくり考えさせたい。

- ①考える時間を確保する
- ②解けた子には、違う解き方も考えさせる
- ③絵・図・言葉等で自力解決をさせる
- ④根拠を基にして考えさせる

7 ペア・グループ学習等がない

子供は教師の一方的な話を聞くと、「単語」でしか話さない。また、いすに座り続けると学習の意欲をなくす。受け身の学習だからだ。子供が仲間との教え合い学び合うペア・グループ学習等を随時取り入れるとよい。協働的な学習では必須なアイテムである。

- ①45～50分、座りっぱなしにさせないようにする
- ②ペア学習は「褒めてアドバイス」とする
- ③班学習は「司会者方式・ノート交換・ワークショップ・ノート展覧会」等の方法を取り入れる

8 ペア・班学習で話す・書く等のルールがない

学習の仕方は分かっているだろうと思い込み、すぐにペア・班学習をさせることは避けたい。ペア・班学習の進め方を事前に指導をしておく必要がある。

- ①情報収集の時間とし、「メモ」をとるルール
- ②相手の意見を聞き、分からないことや曖昧なことには質問をするルール
- ③「つまり〇〇ですね」と自分で解釈したことを伝えるルール
- ④自分の考えが変わったことがあったらノートに書くルール

9 一問一答で進める

一問一答の授業は、「分かりましたか」「いいです」の授業だ。教師が教える意味合いの強い授業だ。それを避け子供が主体的な学びを行うためには、子供同士が考えをつなぎ、広げる、深める意識をもつことが重要である。言語スキルの技能を習得させる方法がある。

- ①対話言語のスキルを身につけさせる
- ②教師は多弁にならない
- ③子供の意見や考えを一回一回拾うことをしない

10 肝心な場面がスモールステップとなっている

解き方を教師がスモールステップで説明していく学習である。この方法は、解き方が分かればよいといった考え方があるので「考える力」は付かない。教わった知識であるので、そのときは分かっても後で分からなくなる。教師が説明をする形式ではなく、子供同士が議論をし合う中で課題を解決をしていく方法が望ましい。

- ①子供たちの話し合いを見守る
- ②話し合いが済んだ後、教師の修正を入れる

③教師は、多弁にならないように心掛ける

11 教師が司会者(つなぎ役) になっている

これまでの授業は、子供の言葉を拾う、子供と子供の考えをつなぐこと等がよしとされてきた。そこでは、教師が司会者になるため常に中心にいる。これでは子供の主体的な授業や協働的な授業は望めない。そこで子供たち自身が意見や考えをつなぐようにすることが重要である。

①相互司会の方法で子供たち自身が話し合いをする

②教師は板書に徹する

③明らかに話し合いが違う方向に向くときは、教師が修正をする

12 教師が用意した「正解」を当てる授業

教師主導の授業は、「正解」を当てるような内容が多い。そのため学び合いを深めることが難しい。そこで学習指導要領にある「問題解決的な学習」を行うとよい。

①子供同士で意見や考えをつなぐ

②誤答や意見を巧みに取り上げる

③子供の考えを教科書や資料につなげ教科目標に迫る

13 発表の羅列で終わる

授業の山場(考察)でグループ同士が交流をする場面がある。その場が発表の羅列で終わることが多い。「私の班は〇〇と考えます」「私の方法は、〇〇です」と時間をかけて発表する形だ。こうした発表は学び合いではない。発表しただけで議論が深まらないからだ。そこで、集団解決(話し合い)の目的を再度考えるとよい。班から出された考えを一つにまとめる、考え方の相違点・共通点を明らかにする、協働して課題を解決する、新たな考えを創る、皆で考えを練り上げる方法等がある。授業に見られる「多くの子供が発表するだけ」を避けるために次の点に留意したい。

①全グループの考えを羅列的に発表しない。行っても短時間で済ませる

②2～3のグループの考えを取り上げ、自分たちのグループとの違いを考えさせる

③教師は、黒板に子供の考えを整理する

14 考察がない

様々な考えを出し合うだけでは意見は深まらない。これまでの知識を教え、分かったことを書くという授業の構図と何ら変わらない。自分の考えを発表し、仲間から質問を受ける「出し合い」、お互いの考えを比べて違いや共通点を出し合う「比べ合い」、一つの意見や考えに「まとめる」方法等が考えられる。留意したいのは、意見の「出し合い」だけで終えないことだ。子供たちが集団で話し合いの「比べ合い」活動こそが学びを豊かにする。

①学習課題を2段構成(前段は教科目標、後段は「考察」とする

②「比較・焦点化・類推・分類・補足・理由・根拠・変容」等の項目で子供が考察を行う。

③「考察」グッズを用意し、子供も教師も行うことを意識する

④考察は教師が司会をするのではなく、子供に任せる

15 形だけの対話「わかりましたか」「いいです」で終わらせる

「わかりましたか」「いいです」で終わらせる授業が多い。分かっているなくても「いいです」の形式的な受け答えが多いからだ。分からなければ分からない、質問したいことがあれば聞くということを子供たちに身に付けさせたい。

①「わかりましたか」「いいです」の対話はしない

②「他にもあります」「付け加えて言います」等の言語スキルで対話をさせる

③反応の仕方を覚えさせる

16 教師が多弁である

授業は子供たち自身が創っていくものである。この視点に立てば教師一人だけが多弁になることはできない。多弁になれば子供は受け身になり話さなくなる。話しても単語しか話さない。

- ①教師は、1 単位時間内で 2～3 割以内しか話さないことを目指す
- ②指示や説明の言葉を徹底的に減らす
- ③教師の教える指導から、子供にも授業進行を担わせる

Ⅲ 学んだことが実感できる振り返り(振り返り)(まとめ・振り返り)

17 まとめを教師がしてしまう

教師が「今日のまとめは、〇〇です」「時間がなくなっただけで振り返りは家庭学習とします」と話すことがある。かつての「教師の話聞き、板書を写す」授業がいまだに続いているからだ。これでは子供に力が付かない。学習の主体が子供であるならば子供自身が自らの言葉でまとめるとよい。

- ①「何が分かったか」「もっと知りたいこと」「友から学んだこと」の 3 視点でまとめる
- ②自分の考えの変容を書く
- ③子供たちそれぞれが自分の言葉でまとめる(全体で同じ文言のまとめをしない)

18 振り返りの時間がない

「まとめ」は、本時の課題に対してまとめるものである。一方、「振り返り」は、他の教科や違う時間にも使える内容のことである。また、教科の特質を踏まえて習熟の時間でもある。書く活動の充実を通して無答率 0 を目指すとよい。

- ①振り返りを毎時間書くことを位置付ける
- ②授業のタイムマネジメントに心掛ける
- ③学習状況調査の問題にある「時数制限や条件に合わせて書く活動」も取り入れる

19 タイムオーバーの授業である(タイムマネジメント例)

導入で教師の説明が多かったり、復習の時間が長いことが主な原因だ。また、学習のねらいがはっきりしていなかったり、話し合いの視点が分からなかったりすることも原因の一つである。集団解決時の発表を長々と順に発表する羅列型発表等もそうさせている。そこで導入時の復習や前時の振り返りを短くする、学習課題をはっきりさせ話し合う視点も明確にする等の工夫が考えられる。

- ①課題の提示(5 分) 簡単で誰もが分かる課題、必要性のある課題とする
- ②問いをもつ(2 分) どんなことを明らかにするのかを個人でイメージする
- ③問いの共有(2 分) 大よその解き方、「答え」を仲間で共有し、全員参加型学習を目指す
- ④自力解決(5～10 分) 主体的な学習となるようにするため、個人思考の時間を大事にする
- ⑤集団解決(15～20 分) 協働的な学習となるように、班学習・全体学習(考察)等を組み合わせる
- ⑥価値の共有(5～10 分) 教師がまとめず子供自身がまとめる。課題の裏返しとする
- ⑦振り返り(3 分) 学んだことが他の時間に使えるものとする

20 教科係りを使っていない

アクティブ・ラーニングの学びは、協働的な学びである。子供同士だけでなく、子供と教師が授業を協働的に創り上げていく学びでもある。これまでは教師が一人で教えることが強いため子供たちは受け身の授業であった。これからは、教師から教わるのではなく子供たち自身が主体的に協働的に学ぶことが重要だ。教師との連絡係りだけではなく、授業の進行を担わせる必要がある。

- ①教師が一人で授業をしない
- ②号令係りだけではなく教科運営係りが授業進行を担う
- ③教師が中心となる授業を減らすために、教師がやっていたことをできるだけ教科係りに回す